
未来の扉

西美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来の扉

【Nコード】

N1863Z

【作者名】

西美

【あらすじ】

大学生の未来はいきなり門で待ち伏せした女に刺された。目を覚ましたそこは暗闇で自分の憧れのタレントと同じ顔の男がいる。

その男は言う「私は道案内、扉を開けて道を選びなさい」
名前知らない男にガクと名前をつけ、未来は不思議な扉を開いていたのだった。その選択の意味は？そして扉の先には…。

前編（前書き）

前編です。後編にて完結する短編となっています。

前編

「林未来さん？」

大学の門の手前でそう見知らぬ女に声かけられた。

「はい？」

そう返事した途端に私は女に突然体当たりをされる。

そして腹部に今まで感じた事もない痛み。

ドクドクと何か銀色の物が刺さり、そして私の体内から赤い水が漏れる。

女は何かわめいていた。

「良樹は私のモノよ！！あんたなんかには渡さないわ！！」

キーキーとうるさい声だ。

良樹は私の彼氏に決まってる。

だって高校の時から付き合いで、一緒にいる為に同じ大学を選んだのだ。

口がパクパクしたが声が出そうにない。

ああ…私は死ぬんだなと目が重くなり、そして閉じた。

それはすぐだった。

「気がつきましたか？」

若い男の声が聞こえる。どこかで聞いたような？

「未来さん。林未来さん」

そう優しく声をかけられ、目をゆっくり開く。

「うわっ」

ビククリして心臓が止まるかと思った。

目の前にいたのは、昔から大好きなタレントのGAKUYAがいたのだから。

「ええっ！！うそっ本物！！」

ニッコリと美形で有名なその顔で優しく微笑まれた。

もう死んでもいい位だ……ん？死んでも？

お腹をおそろおそろ触ってみた。何も無い。

ホッと一安心した。なんだ夢か。

て事は、目の前の彼も夢だろうか？

「これ夢なの？GAKUYAがいるなんて」

GAKUYAはクスクスと楽しそうに笑う。

「貴方に都合の良いように私は見えるんですよ。

それより、そろそろ起きて下さい」

そう言われて、私は立ち上がる。

周囲は真つ暗闇で、私と彼以外は誰もいない。

ほんの少しの光もないのに互いに見える不思議。

やはり夢らしい。

「では行きましようか。貴方にはしなければいけない事があるんです」

「何それは？」

「扉を開き選択する事です」

真面目なGAKUYAもカツコイイと見とれていると

少し怒った様子でたしなめられた。

「ちゃんと正直に決めて下さいね」

いきなりそんな事を言われても意味がわかるはずもなく

「貴方は誰？」

「私は道案内です。けれど決めるのは貴方です未来さん」

と、うやうやしく一礼された。

これがまた最高で、彼氏の良樹は別にして最高に憧れていた人が目の前にいる。

「貴方名前は？」

ご機嫌で聞く私に彼は答えた。

「ありませんね」

「それじゃあ困るじゃない」

「じゃ貴方が決めてください」

そんな事でいいのかな？と思いつつ
どうせ夢だしと適当に決めた。

「じゃ、あなたはガクね！！」

「はい、それで結構です」

ガクに促されて、私は闇を進んでいった。

すぐに目的地についた様子だった。

暗いのに、それが部屋だと認識でした。

目でみるのではなく感覚で。

その部屋の前面に大きな画面がある。

映画館みたいだが椅子はない。

立ち見だろうか？

「ここから始まります。お願いですから正直に答えて下さいね」
ガクが言う。

とりあえず見た感想を言えばいいのだろう。

私は画面をジッと見つめると

なぜか幼い私がそこに出てきた。

「は？」

啞然としつつ、画面はなぜか進む。

まるでその場に自分がいるような臨場感。

幼い私は3歳程だろうか？

トテチテと可愛く歩き、そして大好きだった祖母に抱きつく。

今は亡きお婆ちゃんは、とても私を可愛がってくれた。

その祖母に安心して幼い私は身をゆだねている。

「なつかしいな・・・」

ポツンと独り言が出た。

幼い私は無邪気な顔で祖母に言う。

「お婆ちゃんは年寄りだから死ぬんだよね？」

私はそれを聞き、ビクリと硬直した。

「え？」

ガクを見る。無言でガクは私を見つめ返してきた。画面は進む。

「お婆ちゃんは癌だつてみんな言つてたんだよ」

幼い私は残酷に笑顔で笑いかける。その言葉の意味すら理解していない。

私はガクガクと震えだした。

「やめて・・・」

そう伝えても、ガクは秀麗なその顔を画面に向けたまま今度はこちらを見てもくれなかった。

画面の祖母は悲しげに

「そうかい」

とだけ言つて、幼い私の頭を撫でてくれた。それで映像は終了した。

ガクは震えて無言になる私の耳元で囁くように言う。

「貴方はアレを見て、どう思いましたか？」

私はうつむき、必死で訴える。

「後悔してるわ！祖母は知らなかったのよ自分の病を。なのに私は何も知らないとは言え祖母に告げてしまった」

後悔している。でもアレは映像だったのではないか？

今みたものがなんだったのか、一瞬にして霞がかかりそして未来の脳裏から消えた。

「貴方は選択しました。こちらの扉です。どうぞ」

そして、いつしか浮かび上がった二つの扉の片方を指差した。私はおそろおそろ押すと、あっけなく扉は開く。

奥に続く通路がまっすぐ伸びていた。

ガクにエスコートされ、二人で歩き始める。

「何か見たような気がするんだけど・・・」

ガクは安心させるように静かに私に言う。

「あの部屋の出来事はあの部屋で終わらせませす。それがルールです」

「じゃ今から向かう場所で、また私は何か見て選択するの？」
「その通りです」

偉いですねと、ガクが子供にするように頭を撫でてくれたので私もう20歳なんだけどと照れてしまった。

そうやって、幾つかの映像を見たらしい。

何を見たのか、どれだけ見たのかもあやふやだがその繰り返し行為自体は自分でも把握していた。扉を選び、そして通路を進む。

真っ直ぐな、なららかな通路には時には傾斜がつき下りだったり、上りだったりもした。

足の感覚だけが平坦である事はなかった。

通路を二人で歩みつつガクに話しかける。

「ここどこなの？」

ガクは困ったなという顔をする。

それもまた見とれてしまう位で…。

実は先ほどの部屋を出た時点で私の心はとても寂しかった。

なぜだかわからない。

何を見たのかすら既に記憶にないのに、なぜか心が衰しかった。

それを埋めるようにガクに話かける。

「ガクは最初に、自分の都合良く姿が見えると言ったわね」

今度はガクも気軽に「ええ」と答えてくれた。

「なら私が別の…ええつとホラ、あの韓国スターが好きだったら

今と違う姿で見えたわけ？」

こともなげにガクは「ですね」と答えた。

私は続ける。無言に堪えられなかった。

「なんか映像を見るたびに、覚えていないのに胸がツラくなるのよ。どうせなら、もっと楽しいの見たいもんだわ」

「たとえば？」

「ほら、関西の漫才とか、バラエティとか」

「今はどんなのがあるんですか？」

「今って…テレビみないの？」

自分でも、おかしな質問だと思いながら聞いた。

「いえ、テレビは好きでしたが、そういうものは見なかったの…」

「何見てたの？」

ガクは嬉しそうに答える。

「時代劇ですね」

たぶん私は瞬間的にマヌケな顔をしたと思う。

「時代劇？何それジジ臭い」

心底呆れて私が言っていると、ガクは必死に抗議してきた。

「あれはおもしろいですよ！ともあれ教えて貰えませんか？」

尾張の將軍の最後は一体どうなったんですか」

必死で喰いつかれたが、残念ながら興味のない私には答えられなかった。

「ごめん」

ガクも、あからさまにガツクリと肩を落とす

「いいえ、こちらこそ」

とうなだれた。

そんな会話をしつつ、次の部屋につく。

なんだろう…凄く嫌な予感がする。

前編（後書き）

今回はあからさまにわかるオチかも知れませんが、
ですけど、ぜひ、そこに至るまでの未来の心理を楽しんで欲しいで
す。

ちなみにガクの名前や時代劇なんかは、あまりいじりませんでした。

後編(前書き)

これで完結です。

後編

幾つめかの暗い部屋にガクに背中を押されるように私は入った。

一つの部屋を出るたびに選択してきたであろう私は

またこの部屋で選択しなくてはいけない。

先ほどまでとは違う、何やら重く沈む気持ちを振り絞って

私は頭をあげて画面を見た。

それはすぐに始まった。

「良樹！！」

高校生の姿をした懐かしい姿が映る。

出会った当時の、ほんの少し前の姿。

でも、それが凄く懐かしくて切なくて…。

高校三年の夏。

陸上部の良樹はキラキラ輝いて、顔は10人並みだけど

私に気軽に声をかけてくれて、そして笑うと右頬にだけエクボが出来る。

それが、あなたがとっても可愛くて、気づけば私は常に彼を視線で追っていた。

友達が高校生活最後だから告白しちゃえば？

そんな感じでけしかけられた。

告白なんてされた事もなければ、するのも初めての私。

それでも勇気を振り絞って、でもチャンスがなかなかなくて。

やっと告白出来たのが、偶然を装った良樹の部活の後。

ジューズを差し入れすると同時に、いきなり告白してしまった。

画面の私は、見てわかる程に真っ赤なりんごみたいになって挙動不審だ。

でも精一杯に良樹に告白しているシーン。

良樹は最初は「え？」と言う顔をしてたけど

それでも私を気遣ってか、返事は明日と笑って聞いてくれたのだ。

覚えている。その夜は胸が口から出そうなドキドキがひどくて布団で悶えてゴロゴロと、いつまでも寝付けなかった。明日が来るのが待ち遠しいやら、時よ止まれと思ったり。画面が変わる。

これは知らない。知らない部屋に良樹がいる。

誰の部屋なのか、男の子の部屋らしい。

何人か他の男の子達もいる。陸上の時に良樹と一緒にいた子達だ。彼らが笑って良樹をからかっている。

「モテるなー良樹。モテ期到来ってやつ？羨ましい」

良樹はまんざらでもなさそうに答える。

「でも、あの子だぜ？別にどーって事ないだろ」

心がパキッと凍りついた気がした。

「贅沢言っつなよ。俺なんか誰でもいいから欲しいって」

「そうそう、顔はともかく体はそこそこだったし、あの子」

あの子…間違いなく私だ。

「大人しそうだから、なんでも言う事聞きそうじゃないか」

「夏休みだぜもうすぐ。美しい夏の思い出よ。良樹も少年から大人

へ…」

皆が下品な顔でワツハツハと笑い転げる。

良樹も一緒になって笑っている。

これは何？

「声かけてやっただけで懐いた女だぞ」

良樹は少しウンザリした見たこともない顔をする。

「で？どーすんだよ良樹」

仲間の一人が促した。

「んー、とりあえずキープって感じで捕獲しとくか」

そう答えた声は、間違いなく聞きなれた恋人の声だった。

画面が消えた。終わったらしい。

けれど私は動けなかった。

「貴方はどう思いましたか？」

私の耳に、つとめて冷静なガクの声が届く。

その冷静な声と、表情一つ変えない姿に

私はカッとなった。

「何よ！！笑えばいいでしょ！！」

ガクは無言でこちらを見る。

私はそんな事はおかまいなしに、怒鳴りつけた。

八つ当たりだと理解していても、その人事の感じがくやしくて

何より自分が惨めすぎて。

「キープよ！！私なんか、お情けで付き合っただけだよ。

笑いなさいよ！！アンタみたいに綺麗なら、きっと私も

こんな男と付き合ったり惚れたりしてなかったわよ！」

ハアハアと息を荒げて、私はガクにぶつける。

けれど彼は何一つ言い返す事もなく、

ただ哀しげに静かに瞳を一度だけ閉じただけだ。

私が落ちていくのを待ってか、ガクは再び聞いた。

「それで、貴方はどう思いましたか？」

「どう思っつて…惨めでくやしただけだわ。

知らなければ良かった。」

何か慰めの言葉でもくれるかと期待したが

返ってきたのは無言だけだった。

「どうしたいですか？」

「意味がわからないわ」

ガクは、ゆっくりと言う。

「貴方はどうしたかったですか？」

意味を理解しようと思いを回転させる。

「どうしたかったって…知らなければ付き合いたかったわ。

でも…それでも惚れたのは私だから私にも責任があるわね」

フツと小さな、ため息をつく。そう自分の見る目のなさが悪い。

でも良樹も、もしかしたらアレは友達の前だから

ちよつと悪ぶつて言っただけで本心ではないかも知れない。

「付き合つた事に後悔はないわ」

ガクと視線が交差した。

ガクは華麗に扉の前に進み、そして指差した。

「貴方が選んだ扉はこちらです」

そして左の扉に、早く記憶よ消えろと願いつつ私は向かった。

ツカツカと私とガクは扉の向こうの通路を歩く。

今度はあからさまに下りで、なんだか身がすくむ。

それ以上に胸のモヤモヤが破裂しそうで

何より私は自分が激しく怒っているのを自覚した。

けれど、私には部屋の記憶はもうなくて

何に対して怒っているのか

その気持ちを出す術もなく余計にそれがツラかったのだ。

「ねえガク」

「はい」

優しくガクは答えてくれる。

「いつまでコレを続けるの？」

ガクは私に歩調を合わせてくれながら答える。

「もうすぐ終了だと思えます」

「そうなの」

あと少しか…早く終わらせて帰りたい。

けれど終わった先に何があるのだろうか？

「終わったらどうなるの？」

ガクは肝心な答えはくれない。

この質問もそうだった。

「貴方とはお別れなの？」

ガクは少しビククリしたみたいで一瞬だけ歩調が乱れた。

「せつかく知り合いになれたのに。」

もう少し仲良くなりたいな」

「私とですか？」

照れたのか口元を手で覆うガク。

「うん、だってあのGAKUYAのソックリさんだもん。きつと皆ビックリするよ」

「私がそのタレントに似ているから？」

私は少し後悔して、必死で取り繕う。

「ううん！ええっと…なんていうか

ごめん。顔が好みなのは認める。

けど、なんていうか…ホラ…あれだ」

ジツとガクは私の言葉を待ってくれる。

「あれよ！初めて会った気がしない程に波長が合うと…

私は勝手に思ってるだけなんだけどね」

自分で言って恥ずかしかった。何を言いたいのだ自分は。

あははと笑って誤魔化す私をフォローするようにガクは

「嬉しいです」

と答えてくれた。

さっき言った事は嘘ではない。

ガクとこうやって一緒にいた時間が短いのか長いのか

記憶がないので定かではないけれど。

なぜか私はガクといると落ち着く。

安らぐというのか、離れるのは嫌だ。

終わった先では何があるのだろうか。

この夢が覚めるのだろうか？

ならガクともお別れになってしまう。

「別れたくないな…」

ポツリと独り言が出てしまった。

そしてガクも独り言のようにつぶやくのだった。

「それは貴方が決める事です未来」

どうやら部屋に辿りついたらしい。

するとガクと話して忘れていた、あのモヤモヤや
気分の悪さが蘇ってきた。

画面が映り、そして始まる。

いきなりのベットシーンに私は驚いた。

「ちよ！」

ガクをすぐさま見たが

「ちゃんと見なさい」

とピシヤリと怒られた。

安っぽい、どこかのラブホテルだろうか。

男と女が当然一つのベットにいる。

行為の映像ではなかったのが幸いだが

顔が認識できた途端に、今度こそ私の心は凍り止った。

良樹と…そしてあの女だ。

私を刺した女。その女が馴れ馴れしく私の恋人の肩にもたれ甘えて
いる。

怒りと嫉妬で体が小刻みに震えだす。

「ねえ良樹どうするの…いい加減に待てないんだけど…」

女は男に媚び声で良樹に甘える。

触らないで！それは私の…。

「本当に俺の子なのかよ。てか俺まだやりたい事一杯あるんだけど」
面倒そうに答える良樹。

そう、鼻の頭を指でかく、あの仕草は心底困っている時のだ。

「大丈夫よ、就職もパパの会社があるし、生活も家も心配ないって
ママに相談したら約束してくれたから…」

俺の子？何を言っているの良樹。

「まだ遊びたいし…それにほら、あのキープがいるだろ。

あいつが案外面倒なんだよ。しつこいって言うかさ…」

それでも女の言う、親が全てをの条件は良樹も気になるらしい。

女は必死で良樹を口説く。

私がこの場で、どれだけヤメテと叫んでも届かない。

気づかないうちに涙がホロホロと頬を伝う。

そして思い知らさせる自分の立場。

良樹にとつての私の位置。

そして画面が変わる。

どこかの病室らしい。

女がベットに横たわっている。

そして、その胸元には、あどけない赤ん坊が…。

そこで画面は終わった。

ガクの冷酷で冷静な声が私に問いかける。

「貴方はどう思いましたか？」

答えられるはずもなく、私はポロポロと泣くばかりだ。

今まで溜まっていた全ての息苦しさや哀しさが

雫となって瞳から零れ落ちる。

だけでも、それはいつまでたっても止まらずに

私の心の奥に余計に積もっていくばかり。

「あの子は…良樹の…」

かすれた声で必死で出せたのはソレだけだった。

「ですね」

「本当に」

継るように私は下を向いたまま聞く。

答えは一緒だった。

「ですが、まだ生まれていません」

ガクが言う言葉に、やっと私はノロノロと頭を上げた。

「まだあの命は生まれていない」

なら…それならまだ…。

私は叫んだ。

「なら、まだなんとかなるわね!!」

ガクが聞く。

「なんとかとは？」

「赤ちゃんなんか生まれなければいい!!」

静かな静寂に私の心の叫びが大きく広がった。
そして選択された。

ガクが告げる。

「貴方は選択しました。こちらです」

そして右の扉を示す。

フラつきながら、その扉の前に立つ。

手を扉に当て、そして少しの力でそれは開くだろう。

それを実行しようとした瞬間。

私の中の何かが、私を制止した。

「未来……」

それは声になっただろうか。

「そう…未来よ私……」

手を扉に当てたまま私はつぶやく。

「お婆ちゃんが言ってた。私の名前は未来……」

ガクが促す。

「貴方は選択しました」

固まる私の背後にガクは立ち、そして背中を手でさする。

それは温度すら感じさせない不思議な手だったけれど

なぜか私の奥底から、温かい何かが沸いてくる。

振り返り、ガクを見つめた。

「私の名前には、楽しい未来が一杯あります様について願いがあるの」

ガクはただ黙って私を見つめている。

とても静かで、なんの感情も湧かない綺麗な瞳。

それに向かって私はしゃべり続けた。

「色々な選択もしたわ。間違った選択もしたかも知れない。

けれど未来は一杯あるよって、お婆ちゃんが教えてくれた」

私の瞳に、そして心に力が灯るのがわかる。

「だからダメ！ダメなのガク……！」

だって、あの赤ちゃんにも一杯の未来があるのよ……！」

きっぱりと私は決断した。

ガクはやつと黙った私を再び促す。

「貴方は選択しました」

そして再び指差した扉は……。

先ほどまではなかった空間に三つ目の扉。

それは私を歓迎するように温かく光輝いている。

「これが最後の選択です未来」

ガクは優しく私に言う。

「貴方が元気に大きくなれて良かった。

ずっと心配してたんですよ」

そう言つて、また頭をゆつくりと撫でてくれる。

「貴方の名前は未来。そうだよ未来。

一杯楽しい事があるって名前さね」

ガクの声が、少しずつ歪み、そしてどこか懐かしい声に変わる。

「間違えてもいいんだよ、扉は一杯ある。

そうやって間違いに気づく事が大事なんだよ」

私はその声が誰であるのか。

そしてガクが何者であるのか理解した。

「おば……」

「行きなさい」

小さな姿のその人は扉を指差す。

私は知らぬ間に止まった涙が再び零れないうちにと

ほんの少しの力を入れて、未来の扉を開けたのだった。

眩しい光に包まれて、体が浮き上がり、そして何かに吸い込まれた。

「目を開けて頂戴！未来」

あれ？お母さんの声がする。

「未来、お前は強い子だ、がんばりなさい」

お父さんまで、必死になっている。

「お姉ちゃん、お願い！！」

妹まで、どうしたんだろ？

私はここにいるよ。

それを伝えたくて、うつすらと目を開く。

そこには心配した家族の顔が揃っていた。

病室に運ばれ、そして私は生死を彷徨い意識不明。

目を覚ましての私の一声は

「ただいま」

だった。

少しずつ回復する度に、もう安心しきった家族に

それをからかわれる。

良樹は見舞いに来ない。

むしろ、それは私には精々した。

どちらにせよ、別れ話をするのは退院してからだ。

看護婦さんが運んできた食事を食べつつ

私は元気になつてからの事を考えた。

色々やりたい事は一杯ある。

一番にやりたい事をまず実行しよう。

久しぶりに、祖母の墓に好物だった、おはぎを供えて

そして、あの時代劇のDVDも用意してあげよう。

きっと最終話が気になつて仕方ないはずだ。

DVD見れるかな？と少し笑う。

大学の勉強も頑張つて資格をとつて

そうだ。子供が好きだから保育士を目指してみよう。

彼氏はどうしよう。私は案外面食いだし

まずは自分磨きから入らなければ。

何はともあれ元気になるのが先決だ。

可能性は無量大。

なんたつて未来の扉は無数にある。

それを選択して、ほんの少し勇気を出して押すだけでいいのだから。

後編（後書き）

完結です。書きながら平凡過ぎたな…と思いつつ、今度の主人公は少しは報われる子にしたかったので、こうなりました。

平凡で少し、お調子者の現代の女の子という設定です。

よくある展開と才子だと自覚しながらも、今回のこの話は凹み気味の自分に楽しい未来もあるさという気持ちで書きました。自己満足の駄文です。すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1863z/>

未来の扉

2011年12月7日12時50分発行